ウクライナ情勢巡り講演

「キーウは普段の生活が維持されていた」

道新・渡辺記者

北海道倶楽部主催の特別講演会が5月26日、講師に北海道新聞東京報道センター編集委員の渡辺玲男記者（元モスクワ支局長）を迎え、東京・永田町の「永田町・ほっかいどうスクエア」で開かれた。渡辺記者は2月、取材のためウクライナの首都・キーウを訪問、「街は普段通りの生活が維持されている。食料品など物資の品ぞろえも豊富だった」などと首都の印象を語った。

2月の空襲警報1500回以上
シェルター避難の市民次第に減少

を見せた。

講演の中で、渡辺記者は2月キーウで1500回以上の空襲警報が発令されたことを紹介。ただ、「その都度シェルターに避難する人は次第に少なくなっている」と市民の「空襲慣れ」に言及した。

ただ、「滞在中のホテルでは、窓際のベッドで寝たり仕事をするのは危険。壁で防御されている洗面所で、記事を書いた」などと戦時の緊張感も話した。

その上で、現在の戦況について「ロシアの全面侵攻から3年以上がたち、ロシアに国土の2割を占拠された。戦争の長期化でウクライナ国民の4割は領土で妥協することを容認している」としながらも、「無条件の受け入れではない」と強調した。

また、ウクライナの大統領選を巡っては、「実施には課題が山積。ゼレンスキー大統領の支持率もアップし、ロシアの選挙介入も懸念される」と事実上不可能との認識を示した。

一方、停滞する日ロ関係については「（現在中止されている）北方墓参の再開が糸口になる」と指摘。石破茂政権はトランプ関税やコメ不足の対応に追われ、「日ロ関係は優先度が低いのが現状」と分析した。

「ただ、北海道に一番近い隣国であり、領土問題への関心をつなぎとめるのが北海道新聞の役割だ」と述べた。



ウクライナの現況をめぐり講演する渡辺記者

タイトルは「ウクライナ　会員を中心に約40人が参の今と日ロ関係の行方」。加、鳩山由紀夫元首相も顔